

頼山陽『日本外史』の中国への流布

蔡 毅

日本の漢文学の西伝は、筆者が近年来関心を抱いている課題である。今日に至るまで、凡そ日中の漢文学の交流について語る者であれば、例外無く中国古典文学の日本漢文学に対する圧倒的な影響に注目しているが、反対に日本漢文学もまた中国に伝わり、大なり小なり反響を呼んでいたというのに、こちらについては誰一人として顧みない。理由は明白である。このような「逆輸入」的な日中漢文学の往来は、その数量についていえば中国から日本への流れに対し比喩にならないほど少数であり、ましてや中国の文壇に何らかの影響を与えたこともなく、時に誰かが話にあげたとしても多くは好奇の視線をもって話の種にしているのみであり、それに対して深い歴史的考察や文化の比較を行うわけではなかった。まさにこの故に、この課題が冷遇され、棚上げされてきたのも、理の当然のごとく思える。

しかしながら、史籍を紐解けば、遣唐使より近代に至るまで、日本漢文学の西伝の軌跡は、目につくもの全てがそうであるとは言えないまでも所々に顔をのぞかせており、絲のように途切れず続いている。こうした史実の確認は、日中文化交流史の研究において、軽視できない認識上の意義を有している。まず、この史実は、昔の東アジアにおいて、漢字文化が一つの特異な紐帯となり、異なる文明を持つ各国を緊密に繋げていたことを再度力強く示すものである。第二に、文化交流は主従、強弱、高下の関係をもつと同時に、双方向的な産物でもあり、「片貿易」の一方通行ではないことを証明する。第三に、「詩書の国」からの使者として、古代中国人の日本への印象に、積極的な作用をもたらした。よって筆者のこの一見周

縁的で主流とは言えない研究課題は、きつと大風呂敷ではなく、一定の学術価値を持つであろう。

本論では、ひとまず頼山陽の『日本外史』の中国での流布状況について考察し、こうした逆輸入的文化現象の一側面を明らかにする。この課題については、先行研究として趙建民「『日本外史』的編撰、翻刻及其在中国的流传」がある。その第四章、第五章では『日本外史』西伝の軌跡が描かれ、多くの有益な史料の手がかりが示されているが、惜しむらくは多くが二次資料であり、そのため幾つかの史実については言及するものの詳細でなく、人名や書名にも誤りがあり、大量の関連文献にも目を通せていない。このことに鑑み、本論では趙氏の研究を踏まえた上で、この東アジア漢字文化圏の独特な歴史的現象について、より全面的な検討を行いたい。

一、成書の過程

頼山陽（1780-1832）、名は襄、字は子成、通称久太郎、号を山陽、別号を三十六峯外史といい、大阪に生まれ、広島で育った。江戸後期の著名な漢詩人にして史学家であり、著作に『山陽詩鈔』、『日本政記』、『日本通議』などがあるが、読者が最も多く、広く影響を与えたのは、『日本外史』である。

頼山陽は藩の儒者一家に生まれ、父の頼春水、叔父の頼杏坪はいずれも当時名を馳せた詩人であり、学者であった。頼山陽は幼い頃から経書や史書に親しみ、「平生 古の英雄を談ずるを喜²」んだ。彼は水戸藩主徳川光圀の命で編纂され当時通行していた『大日本史』が、膨大な分量を持ち、かつ堅苦しい言葉で書かれているのを見て、通俗的でわかりやすく、大衆向けの史書を書こうと志した。尊王攘夷、つまり幕府政権への批判は、古を借りて今を風刺する潜在的な目的であった。この書物は源平の争いから始まって同時代の徳川幕府まで、人物伝を中心として書かれており、更に「外史氏曰く」という評語を加えている。全二十二巻。頼山陽は若くして史書を編纂したいという心を持ち、二十五歳の時に執筆を始め、三年で概

ねの初稿を書き上げた。しかしその後何度も修正と潤色を重ね、なんとまる二十年もかけて文政九年（1826）の末ようやく脱稿した。正式に刊行されたのは、頼山陽が世を去って四年後の天保七年（1836）であった。

『日本外史』は漢文によって書かれ、その生き生きとした内容と優れた文章が互いに引き立て合っており、日本漢文学史上最も名のある著作であると言つてよい。世に出てから八十余種の版が刊行されており、「日本人の書いた漢文の書物も随分沢山あるが、『日本外史』の如く広く長く愛読せられて今日に及んで居るものは他に無いのである」³⁾。

二、中国への輸出

現在わかっているところでは、頼山陽『日本外史』は1864年（日本の元治元年、清の同治三年）に中国に伝わった。時に日本は幕末に当たり、鎖国が徐々に解かれていった頃であった。日本から正式に上海へ出された船は、二百年にわたる江戸の鎖国の後初めて清に使用した「千歳丸」であり、その渡航が1862年のことであった。それから時をおかずに「健順丸」が中国を訪れたが、『日本外史』はまさにこの船とともに海を渡り、中国へやって来たのである。「健順丸」が上海に逗留したのは1864年3月28日から5月14日（旧暦の2月21日から4月9日）の約一カ月半であった。この時の遠征について、この船の船長である山口錫次郎が航海日記を残している。その日記は主に上海での見聞を記録しているので『黄浦志』と名付けられた。原本は京都大学附属図書館に収められているが、後に長崎高等商業学校教授武藤長藏の整理を経て長崎高等商業学校の研究館年報『商業と経済』第五年第二冊（1925年2月刊行）に載せられた。著名な学者の新村出がこれに「緒言」を書いたので、『黄浦志』は『新村出全集』第十卷に附録として収録されており、今は容易に見ることができる。この本からは、『日本外史』が最初に中国に伝わった際の概略が以下のようであったことがわかる。

元治元年（清の同治三年、1864年）二月二十一日（西暦3月28日⁴⁾、「健順丸」は上海に到着した。正使であり船長でも

あったのは、「御軍艦奉行支配組頭箱館奉行支配調役並」山口拳直（錫次郎、1836-?）であり、全部で五十人余りの一行であった。このとき幕府の使者団が上海を訪れた主な目的は日清貿易を展開することであったが、兩國の人間が接触する以上、必然としてある種の文化交流が起こった。『黄浦志』の三月三日の条には、山口拳直らが上海の役所に赴き道台に会ったことが記されている。三月廿四日の条には、「道台応宝寺使⁵をして国史略一部を請ふ」と述べ、あわせてその手紙を載せている。そこには次のように言う。

再查有文政新刻巖東園先生編次『国史略』一書、系貴国纂修。不知尊処現在有無其带有此書？並望惠以全部、得広見聞為至幸⁶。

再び査ぶるに文政新刻の巖東園先生編次『国史略』一書有り、貴国の纂修に係る。知らず尊処に現在此の書を其の帶有すること有りや無しや？並びに全部を以て惠まれんことを望む、見聞を広むるを得れば至幸と為す。

応宝時は日本の歴史を理解するために、この船に『国史略』があれば恵んで欲しいと望んだ。『国史略』の著者は巖垣松苗（1774-1849）であり、字は長等、また千尺、号を謙亭、また東園といい、京都の人である。『国史略』は漢文の編年体史書で、全部で五卷、所謂「神代」から天正十六年（1588）までの日本の歴史を書き記す。尊皇思想が甚だ濃厚な書物で、文政九年（1826）に刊行された。残念ながら「健順丸」はこの書物を携えておらず、三月廿五日の条に「道台望む所の国史略、船中此を蔵するなく、仍て日本外史一部を贈る」とある。そこには返書の全文が載せてあるが、その中に次のように言う。

且所命巖東園編次『国史略』、船中带有者、篋底有『日本外史』一部、弊邦処士頼襄之所編。雖不応尊望、聊供玉榻之

下賜覧⁷⁾。

且く命ぜらる所の巖東園編次『国史略』、船中に帶有する者、篋底に『日本外史』一部有り、弊邦の処士頼襄の編する所。尊望に应ぜずと雖も、聊か玉榻の下に供し覽を賜らん。

この手紙の署名は「山口錫次郎」であり、日付は「三月廿五日」である。どうやら『日本外史』が贈られたのは、船に『国史略』が無かったことを補うものであったらしい。しかしこの偶然の補缺は、却って上海道台応宝時に意外な收穫を齎した。何故ならば『日本外史』の日本史学における地位は、内容のうえでも形式のうえでも、『国史略』より遙かに高かったからである。「健順丸」の船員が国を出て遠く使いする際になお携帯していたことも、この書物が日本で広く流行していたことを示している。

四月九日（西暦5月14日）、「健順丸」は日本に向けて出航した。それに先立って応宝時は人を使わして山口船長に詩箋と湖縵を贈った。その日の日記にその書簡が収録されている。

承贖『外史』全部、頃從簿領余間一為繙閱、作者於貴邦將門猷烈記叙詳、不似『吾妻鏡』諸書僅拳匡略。文筆老、簡練有法。風聞海東多績學士、頼君其一班矣。⁸⁾

『外史』全部を承贖し、頃 簿領の余間に從ひて一に繙閱を為すに、作者 貴邦の將門猷烈に於いて詳らかに記叙し、『吾妻鏡』諸書の僅かに匡略を拳ぐるに似ず。文筆老にして、簡練法有り。風聞す海東に績学の士多しと、頼君 其の一斑なり。（文中に疏漏があるのではないかと思われるが、ここでは原文をそのままあげておく。）

どうやら応宝時は日本の歴史について全く知らなかったわけではなく、『吾妻鏡』などの代表的な史書を読んだことがあ

るのみならず、出版されたばかりの最新の史学著作にも関心を持って積極的に求め、新たな書物を手に入れればすぐに目を通し、自分で評価を下したらしい。その背景を考えてみるに、当時日本と中国がともに西洋の軍事的、文化的圧力に立ち向かってきたことによるのだろう。中国の文人の日本への関心は倍増しており、一国を知るにはまずその歴史を知らねばならないという意識のもと、このように書物を求めたのだ。応宝時の批評は、今知られている中国の文人のこの書への評価として最も早いものであり、注目に値する。

この後、日本と清とは国交を結び、『日本外史』もそれに伴って再び外交の場へと現れた。日本初の駐清国大使副島種臣は1873年に北京に到着し、7月1日に、同文館に雇われていた教師、アメリカ人丁韞良(W.A.P. マーティン)が自らの漢訳著書を持って副島のもとを訪れた際、「大使酬之以『日本外史』(大使之に酬ゆるに『日本外史』を以てし)」、丁韞良はそれを同文館にて永久に保管すると言った。もちろん、国の「正史」として副島が清の朝廷に贈ったのは『大日本史』十部、及び『群書治要』等の書物であった。二ヶ月余り後、彼は更に丁韞良に『大日本史』一部を贈った。⁹⁾もしかすると副島にとっては、『日本外史』は結局のところ「外」なのであって、国史としては、「正」史の補いとなるものでしかなかったのかもしれない。

この後、『日本外史』は様々な経路で中国に伝わり、広く普及していった。例えば清末の大儒俞樾は『東瀛詩選』を編纂していたので日本の僧侶北方心泉と交流があったが、北方心泉は俞樾が日本漢詩の選集を作るのに史実の参考として『日本外史』一部を寄贈した。俞樾『春在堂詩編』にそのことを詠んだ詩が見える。また、孫宝瑄『忘山廬日記』の光緒二十三年(1897)正月二十五日の条には彼と『日本外史』との邂逅が記されており、大変興味深い。

至棋盤街書肆購書、見有『日本外史』一部、聞文筆極条達、索價頗昂、未購也。¹⁰⁾

棋盤街の書肆に至りて書を購ふに、『日本外史』一部の有るを見、聞くならく文筆 極めて条達、價を索むるに頗る昂

く、未だ購はざるなり。

孫宝瑄(1874-1924)の父孫詒経は、刑部、戸部侍郎の官職まで昇っており、このような役人の豊かな家庭の子弟が價格の高さを嘆き、尻込みしたというのだから、この書物が中国に伝わってから三十年あまり経っていたとはいえ、北京の棋盤街の書店はなおも奇貨であると恃み、高価を出してくれなければ売らなかったのである。無論、孫宝瑄は後にやはり大枚をはたいて買う決意をし、彼の後の日記の中に、家で『日本外史』を「雨読」「陰録」した記録が残っている。

こうした私人の蔵書は、もとより正確な数を知ることができないが、公の蔵書の数から、書物の流通の大まかな程度を窺い知ることができる。王宝平氏主編の『中国館蔵日人漢文書目』が中国国内の68の図書館を調査したところによると、『日本外史』の中国の図書館に於ける蔵書には全部で23種の日本の版本があり、刊行年月のわかるものは、最も早いもので文政十年(1827)の試刊本、最も遅いものは明治三十九年(1906)のもので、中国の南から北まで30の図書館に所蔵されていた。⁽¹⁾この『中国館蔵日人漢文書目』に収録する日本人の漢文「通史」類の著作のうち、中国の図書館での蔵書数が『日本外史』に迫るのは、「正史」である『大日本史』であり、計5種類の版本、21の図書館に所蔵されている。⁽²⁾比べてみると、『日本外史』は明らかに飛び抜けているのである。

三、錢懌の評点

『日本外史』の中国での普及においては、各種の日本刊本のほか、中国の翻刻本がより目を引く。何故ならば翻刻し重版されたということは、この書物が中国において多数の読者に求められており、輸入される原本だけに頼ってはいては賄いきれなくなったことを意味するからである。現在知られている『日本外史』の中国刊本は二種類有り、一つは光緒元年(1875)

の広東刊本（二帙）⁽³⁾、もう一つは錢樸評点本であり、初版光緒五年（1879）、光緒十五年（1889）に再版されたもので、上海読史堂によって刊行された（十二帙）。

錢樸（？-1882）は字は子琴、蘇州府無錫県の人、その生涯は未詳である。近頃中国の骨董市場で彼の書がオークションにかけられ、彼が書を日本人の皆川撰山、速水儀卿、後藤基照及び「森本主人」「大日本語雲（？）先生」等に贈ったという書き付けが見られ、彼と日本には浅からぬ縁があったことがわかる。その「送岡田篁所先生歸日本序」にいう。

同治初年、余五至長崎島。幸附諸君之末光、其間志同道合、為岡田篁所先生⁽⁴⁾。

同治初年、余 五たび長崎島に至る。幸ひに諸君の末光に附し、其の間志同道合として道合するは、岡田篁所先生為り。

岡田篁所（1821-1903）、名は穆、字は清風、号を篁所、大可山人といい、長崎の儒医であった。1882年2月から4月にかけて上海、蘇州一帯を訪れ、帰国後に中国人との筆談資料に基づいて『滬吳日記』二巻を撰した。錢樸が別れに臨んで贈った序文は、彼の生涯の終わり頃に作られたものと思われ、彼はこの後間もなく世を去った。同治初年というのは、まさに日本の鎖国が解かれたばかりの頃で、彼が五度も長崎を訪れた目的はよくわからない。一説に1871年に上海を訪れた日本人の書き残したものに「清国駐長崎領事錢子琴」という言葉があり、ところが清王朝が近代的な意味での外交員を日本に駐留させるのは1877年に始まったことであるから、当時錢樸は日中貿易「宝蘇局」が長崎に人員を駐留させる旧制を引き継いでいたのだらうという。その後彼は更に東京へも行き、『読売新聞』明治十二年（1879）7月29日は一面に特集記事を載せて錢樸を「我が国の山水を愛する詩書に優れた文人」と称し、彼が読売新聞社の加藤九郎の自宅を訪問した際に即席で詩を吟じ揮毫し賞賛を受けたと述べ、続けて錢樸の住所を紹介し、彼の書画を手に入りたい者は自分で訪ねて行くようにと言っている。その文中で特に目を引くのは、日本初の駐清大使副島種臣が上海に滞在した際、錢樸を招き、甚だ丁重に遇し

たということである。「先年副島公が支那に使ひされ上海に滞留の節は、毎に同氏を招き愛顧されたりと云ふ」。副島の『蒼海詩選』巻二を見ると、「次韻答錢子琴」という五言古詩がある。その中に次のようにいう。

錢君博洽士、論及墨香裏。至其言要理、可知鬼神泣。¹⁵

錢君は博洽の士たり、論じて墨香裏に及ぶ。其の言の要理に至りては、鬼神の泣くを知るべし。

この詩は唱和の作品であり、大げさに褒めているきらいはあるが、二人に交流があったことは争いようなない事実である。錢懌はこのような様々な経験によって日本文化に染まり、日本の文人と知り合い交流して、心の奥底に一種の「日本コンプレックス」を抱いていたのであり、彼が後に『日本外史』を特に歓迎したことにも、こうした心理が働いていた。

錢懌評点本の表紙の書名は『日本外史評』となっており、扉では「頼襄子成著『日本外史』、錢懌子琴評閱」となっている。巻首には齊学裘の光緒三年（1877）十月の序がある。

孟冬十日、錢君子琴手持『日本外史』視余、云是日本頼子成所著。余受而讀之、筆老氣充、辭嚴議正、正如讀太史公『史記』、令人百讀不厭、不朽之作也。觀其外史詳明、則國史之嚴密更可知矣。吾友子琴、批語精微、引人入勝、可為讀史之一助。

孟冬十日、錢君子琴 手に『日本外史』を持ち余に視せ、是れ日本頼子成の著す所と云ふ。余 受けて之を讀むに、筆老にして氣 充ち、辭は嚴にして議は正しく、正に太史公『史記』を讀むが如く、人をして百たび讀みて厭かざらしむ、不朽の作なり。其の外史の詳明なるを觀れば、則ち國史の嚴密 更に知るべきかな。吾が友子琴、批語精微にして、人を引き勝に入る、讀史の一助と為すべし。

齊学裘 (1803?)、字は子貞、一に字子治と作る。号は玉溪、晩年の号を老顛といい、安徽の婺源 (今は江西省に属す) の人。詩文に巧みで、書画にも長じており、光緒年間に上海に寓居して劉熙載、毛祥齡等と交流があった。著作に『蕉窗詩鈔』、『清画家詩史』、『寄心齋詩話』、『見聞隨筆』、『見聞統録』等がある。錢樸と同様、齊学裘もまた日本人との交遊に熱心であり、先に引いた副島種臣の『蒼海詩選』の中に、齊と唱和した作品が卷二「和齊玉溪捕鼠詩用其三十韻」、卷三「贈齊玉溪先生兼呈賢息梅孫」、卷五「同齊玉溪和杜甫秋興八首原韻」の三首ある。齊の副島との関係は、錢樸とのそれよりずっと深かったようだ。齊学裘と錢樸の間にはまだはつきりしない著作権上の「案件」があるので、ここで彼の賛語を引いておく。

錢樸の自序はまる一年後、光緒四年 (1878) 十月に書かれた。

余至日本屢矣。与其国士大夫交、言論之間而我国之古今政治山川風物、無不源源本本、洞悉無遺。而其国之礼楽政教、明主賢臣、茫乎其未有聞也、不禁惘然者久之。蓋彼皆讀我国之書、而我未讀其国之書也。於是遍閱其史乘、奈文字晦澀、不終卷欲眠。後得『外史』讀之、凡二十二卷。其中自平源專政、包拳宇内、迨至陪臣執国命、而宰制環瀛。後則英賢崛起、豪傑奮興、割劇分裂、由分而合、由合而分。八九百年事迹、包括無遺、五畿六道之風土人情、昭然若揭。至於文筆之工、離奇操縱、無不如意。叙事簡賅、議論明通、褒貶微顯、真良史之才、文章之矩矱也。丁丑秋、閑居無事、勤加玩索、喜其筆法嚴密、一秉左史、遂謬加朱墨。固知史佚体例只用提綱、從無評贊、何必多此一挙、以遺譏大雅乎？夫亦出於情之所不容已。更同好有人、如登宝山、極口嘆絕、竟自忘其醜矣。

余 日本に至ること屢たり。其の国士大夫と交はり、言論の間にして我が国の古今政治山川風物、源源本本たらざる無く、洞悉して遺無し。而るに其の国の礼楽政教、明主賢臣、茫乎として其れ未だ聞く有らざるなり、惘然たるを禁じざる者之を久しくす。蓋し彼 皆我が国の書を読み、而るに我 未だ其の国の書を読まざるなり。是に於て遍く其の史

乗を閲するに、文字の晦澀を奈せん、巻を終えずして眠らんと欲す。後に『外史』を得て之を読み、凡そ二十二卷。其中 平源の專政より、宇内を包挙し、陪臣の国命を執るに迨至して、環瀛を宰制す。後なれば則ち英賢崛起し、豪傑奮興し、割劇分裂、分よりして合し、合よりして分かつ。八九百年の事迹、包括して遺無く、五畿六道の風土人情、昭然として掲ぐるが如し。文筆の工に至りては、離奇操縦、如意ならざる無し。叙事は簡賅にして、議論は明通、褒貶微顯、真に良史の才にして、文章の矩矱なり。丁丑の秋、閑居して事無く、勤めて玩索を加え、其の筆法の嚴密にして、一に左史を乗るを喜び、遂に謬ちて朱墨を加ふ。固より史伝の体例は只だ提綱を用ひ、従ひて評贊無きを知るに、何ぞ必ず此の一挙を多くし、以て大雅を遺譏せんか。夫れ亦た情の容れざる所に出づるのみ。更に同好人有り、宝山に登る如く、口を極めて嘆絶し、竟に自ら其の醜を忘れたり。

この文章によれば錢懌が『日本外史』に評点を加えた由来が分かるので、長くなるのを厭わず原文をそのまま引いた（この文には文字の誤りがあるかもしれないが、全て原文のままである）。「余 日本に至ること屢たり」というのは、前に述べた「五たび長崎に至る」ことと東京に遊歴したようなことを指し、日中のお互いへの理解度の差が天と地ほど隔たっているのを嘆いたのは、当時の「知日派」に共通する心境であった。中国人が編纂した日本史には、まず黄遵憲『日本国志』があるが、黄遵憲は錢懌が序を書いた年の年末にようやく日本へ行ったばかりで、この書物が正式に出版されたのは十七年の後を待たねばならず、梁啓超はこの書物かもしれないと十年早く世に出ていけば、中国は日本の内情を概ね理解することができ、或いは日清戦争の敗戦は無かったかもしれないと嘆じた。このような背景の中で、錢懌が他山の石を借り、中国人が日本の史実に暗いという欠点を此かでも補おうとしたことは、賢明であったと言えるが、彼が更に注目したのは、『日本外史』の史家としての才能や見識、文章といった部分であった。「筆法の嚴密にして、一に左史を乗る」とは、まるで中国の史家の作品を読むかのように扱い、その文章が優美で生き生きとし、叙述が人を惹き付けることは、ほかの「文字晦澀」な

日本の史書に遙かに勝っているとする。故に彼は「情の容れざる所に出」で、「謬ちて朱墨を加」えずにいられず、評点を加えたのである。

錢樸の評点には、自序の後に「凡例」と「総評」が置かれている。彼は原著二十二卷を合して十四卷とし、各卷の本文の上に伝統的な方式で評点を書き加え、ほぼ全ての頁に按語と批評を綴る。各卷の評語の数について筆者が統計を行ったところ、以下のようなになった。

卷一、156条。卷二、137条。卷三、129条。卷四、151条。卷五、134条。卷六、115条。卷七、142条。卷八、122条。卷九、84条。卷十、113条。卷十一、144条。卷十二、115条。卷十三、102条。卷十四、89条。合計 1733条。

その内容は或いは歴史上の人物や事件についての感嘆、或いは話の展開についての提示なのだが、最も多いのは文章の書き方に関する評注である。例えば「此是加倍引襯法（此は是れ加倍引襯の法なり）」（卷一 29頁上）、「開出波瀾、文氣動宕（波瀾を開出し、文氣動宕）」（卷八 17頁上）といったふうだ。ここで一つ実例を見てみよう。天文二十二年（1553）から永祿七年（1564）の十二年間、越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄は覇を争って川中島で五度の決戦をしたが、そのうち天文二十三年（1554）の川中島の合戦について、卷十一「足利氏後記」に次のような手に汗握る場面が記されている。

信玄与数十騎走。有一騎黄襖骝馬、以白布裏面、拔大刀来呼曰、信玄何在？信玄躍馬乱河、将逃。騎亦乱河、罵曰、「豎子在此乎？」举刀撃之。信玄不暇拔刀、以所持麾扇扞之。扇折、又撃斫其肩。甲斐従士欲救之、水駛不可近。隊将原大隅、槍刺其騎、不中。举槍打之、中馬首、馬驚跳入湍中、信玄纔免。

信玄数十騎と走る。一騎有り、黄襖骝馬、白布を以て面を裏み、大刀を抜きて来たりて呼びて曰く、「信玄何くに在りや」と。信玄馬を躍らせ河を乱り、将に逃れんとす。騎も亦た河を乱り、罵りて曰く、「豎子此に在るか」と。刀を挙げて之を撃つ。信玄刀を抜くに暇あらず、持つ所の麾扇を以て之を扞ぐ。扇折れ、又た撃ちて其の肩を斫る。甲斐の従

士之を救はんと欲するも、水駛くして近づくべからず。隊将原大隅、槍もて其の騎を刺すに、中たらず。槍を挙げて之を打ち、馬首に中たり、馬驚きて跳ねて湍中に入り、信玄纔かに免る。

この一段は武田信玄が乱戦の中、僥倖にも逃れた場面を描いており、生き生きとした鮮やかな描写で、『三国演義』の戦いの描写のような見事さである。これに対して錢樸は次のように評する。

必謂信玄勝矣、不意短兵相接。忽爾一将突出、氣勢如龍。

必ず信玄勝ちたりと謂ふに、意えず短兵相接す。忽爾として一将突出し、氣勢龍の如し。

如聞其声、如見其形。転勝為敗、慌急無措、皆能曲曲伝神。

其の声を聞くが如く、其の形を見るが如し。勝を転じて敗と為し、慌急して措無く、皆能く曲曲として神を伝ふ。

これは毛宗崗の評点と同じように、要所を抉り出し、細かく評している。清代には、毛評『三国演義』が甚だ流行しており、錢樸はその流れを受け継いで、頼山陽の『日本外史』を小説と同等に扱い、このように評している。要するに、錢樸の評点は田舎者の浅薄さを免れず、まっとうな見識があるわけではないのだが、しかし日中の文化交流史上、これは中国の文人が日本の史書を評点という方式で推奨した初めての例であり、その意義を軽視できないことは明らかである。

四、諸家の論贊

錢樸は『日本外史』を大変気に入り、この上なく褒めている。しかし彼の評点が世に出て後、日中いずれからも、彼と意

見を異にする者が、それぞれの角度から批評を行った。

日本人としては、岡千仞がいる。岡千仞（1833—1914）、号は鹿門、仙台の人で、明治時代の著名な漢学者である。かつて大政官修史官を務め、中国の南北に漫遊した。その『觀光紀遊』卷一「航滬日記」明治十七年六月八日（1884）、清光緒十年五月十五日）の条に次のようにいう。

過書肆掃葉山房、插架萬卷、一半熟書。偶閱生書、皆坊間陋本。有錢子琴所評『外史』。余曾見子琴、筆話不成語。吟香曰、『外史』評成其師齊学裘之手。子琴三年前死、其妻無可食、屢來乞憐。又曰、中人漸用心東洋大勢、『東瀛詩撰』、『朝鮮志略』、『安南国志』等書盛售。¹⁷⁾

書肆掃葉山房を過り、插架の萬卷、一半は熟書。偶たま生書を閱すれば、皆坊間の陋本。錢子琴評する所の『外史』有り。余曾て子琴に見え、筆話するも語を成さず。吟香曰く、『外史』の評 其の師齊学裘の手に成る。子琴三年前に死し、其の妻食うべき無く、屢來たりて憐を乞ふ。又た曰く、中人漸く東洋の大勢に用心し、『東瀛詩撰』、『朝鮮志略』、『安南国志』等の書盛んに售る。

岡千仞は『日本外史』に序を書いており、この書物のことを格別に気にかけていた。彼が紹介した錢樸の裏事情を暴いた「吟香」とは、岸田吟香（1833-1905）、字は国華、備前（今の岡山県）の人のことである。岸田吟香は明治時代の著名な社会活動家で、かつて新聞出版や医療薬品など、多岐に渉る分野の仕事を経験しており、上海に常駐して当地の文人の多くと交流を持った。錢樸や齊学裘もその交遊圏内にいたのである。そして先に紹介した齊学裘の著述や交友関係から見ると、その学術的な地位は明らかに錢樸よりも上であった。岸田吟香が錢樸の評点はその実齊学裘が代筆したものであるといえる。いかなる根拠が有るのかはわからないが、齊学裘が錢樸の為に序を書いている以上、弟子の為にそのように我が身の値を下

げ、代筆してからその上名を隠すというようなことはあり得ないだろうと思われる。しかし岸田吟香から岡千仞に至るまで、錢懌に言及しながら一様に齒牙にもかけない様子からして、日本人の意識の中で錢懌の地位が低かったことがわかる。文中に「中人漸く東洋の大勢に用心し」といい、あわせて『東瀛詩撰』（おそらく『東瀛詩選』のことであろう。兪樾編、これより一年前に刊行されていた）等の書名を例として挙げているのは、中国人が日本を中心とする東アジアの情勢に対して次第に関心を払い始めたという動向を鋭く観察している。

中国人としては、譚献がいる。吉川幸次郎氏が『漢文の話』で、

『日本外史』の文章は、日本漢文であって、中国人には読めない、という無責任な批評を、ときどき耳にする。思いすごしの誤解である。山陽の文章を激賞した中国人としては、清朝末年の学者、譚献がある。その読書の日記である『復堂日記』は、そのころの清国の日本ブームをも一因とするであろう。⁽¹⁸⁾

と述べたうえ、譚献の話を二つ引用して論評している。ここでは吉川氏の指摘に基づいて、さらに検討したい。

譚献（1831—1901）、字は仲修、号を復堂、晩号を半庵といい、浙江仁和（今の杭州）の人。挙人になった後教諭、知県を務め、また幾つかの書院を取り仕切ったことがある。平生読書が大変好み、涉獵した書物は幅広く、著述も甚だ豊富だが、多くは出版されていない。ただ、『篋中詞』、『復堂詞録』といった選評は比較的有名である。その一生の読書歴は、『復堂日記』に載っているが、そのうち『日本外史』に関する記録が三つある。

まずは彼の錢懌に対する批評を見ておこう。

今滬上刻錢繹子琴評本、語未離時文批尾白科。（卷六壬午条、1882⁽¹⁹⁾）

今 滬上に錢繹（「懌」の誤り）子琴の評本を刻し、語未だ時文の批尾白科を離れず。

錢樸の評は「時文」、即ち八股文の型を脱していないという、譚獻のこの言葉は正鵠を射ていると言える。しかし譚獻は『日本外史』そのものについては、なお賞賛している。彼がこの書物を初めて読んだのは1873年のことであった。

閱『日本外史』、至「信玄」、「謙信」紀、兩才相当、使人神王。詳述戎事、機智百出、与中原史事不殊。東国喜聚墳籍、豈将才亦有稽古之力、抑不免傳会邪？相門專政、始平源氏、当宋哲宗、終於徳川家齊、已当道光朝矣。近代所謂將軍者、信長弑而秀吉興、秀吉死而家康盛。矛戟相尋、托於忠信。權謀智力、偉然可觀。近則慶喜失職、国王親政且十年、西人訁之、国事又亟為大變也。(卷三癸酉条、1873)²⁰

『日本外史』を閲するに、「信玄」、「謙信」紀に至り、兩才相ひ当たり、人の神(たましい)をして王(さかん)ならしむ。戎事を詳述し、機智百出し、中原の史事と殊ならず。東国墳籍を聚むるを喜び、豈に将才も亦た稽古の力有らんとするか、抑そも傳会を免れざるか？相門の專政、平源氏に始まり、宋の哲宗に当たり、徳川家齊に終はり、已に道光朝に当たれり。近代の所謂將軍なる者は、信長弑されて秀吉興り、秀吉死して家康盛んなり。矛戟相ひ尋ね、忠信に托す。權謀智力、偉然として觀るべし。近ければ慶喜職を失ひ、国王親政して且つ十年、西人之に訁し、国事又た亟やかに大變を為すなり。

「信玄紀」と「謙信紀」は、前に引いたように、日本でも最も鮮やかに描かれていると考えられている。「兩才相ひ当たり、人の神をして王ならしむ」とは、譚獻は慧眼にして優れたものをよく見分け、この日本の歴史の行方を決定した兩雄の対決という史実の重要性を見出したのみでなく、頼山陽の人物を描写する言葉の使い方、文章の作り方が優れて美しいことも見出したのである。故に彼は続けて『日本外史』についても「戎事を詳述し、機智百出し、中原の史事と殊ならず。東国墳籍を聚むるを喜び、豈に将才亦た稽古の力有らんとするか、抑も傳会を免れざるか」とコメントしている。彼は頼山

陽の文章の風格を賞賛し、また日本の歴史と中国の歴史は似ており、文物や典籍が多く残っていることを指摘している。最後の一言でやや貶めているのは、当時の文人が日本に対して一般的に抱いていた軽視の態度が自然と表れたものである。上に引いた文の後半の日本史の概述は、甚だ的確であり、「近ければ慶喜職を失ひ」という一文は『日本外史』が世に出たよりも後の出来事であるから、彼が日本の史実及び近況をよく知っていたことがわかる。

『日本外史』の叙事の精彩かつ写実的なことは、譚献にとって印象深いものであったようだ。数年後に王韜の『普法戦紀』を読んだ際、彼は再び『日本外史』を引き合いに出して比較している。

閩王韜『普法戦紀』、驚勁略似『漢書』。往見『日本外史』紀平秀吉微時養馬以至当国、則神似孟堅。(卷三乙亥条、1875)⁽¹⁾

王韜『普法戦紀』を閲するに、驚勁 略『漢書』に似る。往に『日本外史』の平秀吉微なる時馬を養ひ以て国に当たるに至るを紀すを見れば、則ち孟堅に神似す。

頼山陽が班固に「神似す」という評價は並大抵のものではない。何故ならば中国の伝統の中で、「班馬」(班固、司馬遷)は並び称せられ、しかも多くの人は『漢書』の叙事は謹厳にして詳細であること『史記』に勝ると考えているからである。九年の後、譚献はまたもや『日本外史』と出会う。このとき彼が見たのこそ、錢樸の評点本であった。

日本外史、東国頼襄著。前假仲瀛藏本読過、今滬上刻錢樸子琴評本、語未離時文批尾白科。頼襄読中書、有意規摹『左伝』、『史記』、雖虎賁中郎、似在前明王元美一流之上。日本世卿氏族家政陪臣、頗与春秋時勢相近、易於学『左氏』也。島上片土、動称天下、千里共主、直曰天王、一何可笑。(卷六壬午条、1882)⁽²⁾

日本外史、東国頼襄の著なり。前に仲瀛藏本を假りて読み過ぎ、今滬上に銭繹（「懌」の誤り）子琴の評本を刻し、語未だ時文の批尾白科を離れず。頼襄中書を読み、『左伝』、『史記』を規摹するに意有り、虎賁中郎なりと雖も、前明の王元美一流の上に在るに似たり。日本の世卿氏族家政陪臣、頗る春秋の時勢と相ひ近く、『左氏』を学ぶに易きなり。島上の片土、動きて天下を称し、千里の共主、直ちに天王を曰ふ、一に何ぞ笑ふべき。

「仲瀛」とは即ち高仲瀛であろう。杭州の人士で、譚猷と家ぐるみの付き合いがあり、『復堂日記』には彼に関する記載が多くある。庚午（1870）の条に「仲瀛攜示日本人所刻『三策』（仲瀛 日本人の刻する所の『三策』を携示す）」と記し、またそのイギリスに対抗する為の「上、中、下」の三つの策を詳しく記録し、「署名狩野深蔵稿、不知其名氏（署名するに狩野深蔵の稿と、其の名氏を知らず²³）」という。高仲瀛の所持していた日本の漢籍は少なくなかったことがわかり、『日本外史』はおそらくその個人的な蔵書であったのだろう。前に中国で翻刻された『日本外史』のうち、最も早いのは光緒元年（1875）の広東刊本であると述べたが、譚猷が初めて『日本外史』を読んだのはその二年前であるから、仲瀛の所蔵していたのは日本刊本だったはずである。譚猷は頼山陽が「『左伝』、『史記』を規摹するに意有り」と考え、中国史学の伝統との継承関係を指摘し、「虎賁中郎なりと雖も」、つまり少々行き過ぎて型通りになぞり真似ている嫌いはあるけれども、明代の王世貞（元美）と比べると、なおそれよりは上であるという。これについて吉川幸次郎氏は次のように絶賛している。

これはたいへんなほめ方である。「中書」とは中国の書物。「虎賁中郎」は『後漢書』の蔡邕伝にもとづく故事であって、ある典型がなくなつたのちの代替品。古代の文章のまがいものではあるけれども、「王元美」すなわち明の文学の大家である王世貞などのそれらよりは、この頼襄のほうがすぐれている、というのである。²⁴

実のところ『復堂日記』の中には王世貞について褒貶いずれも書かれていて、もしもその「元美天才本高，生唐以前亦足名家。吠声之口至今未已，文章得失豈有公是非哉²⁵（元美 天才本より高く、唐以前に生まれるれば亦た名家たるに足る。吠声の口 今に至るも未だ已まず、文章の得失 豈に公の是非有らんかな）」という記述と比べると、矛盾しているように思える。しかしここからも、彼が頼山陽に対して好意的な評価をしていたことがわかる。文末の、日本は国土が狭いにも関わらず何かというところ「天下」「天王」と自称することに対する嘲笑は、当時の中国の文人固有の「大国心理」を表している。

譚献のほか、史料価値の視点から『日本外史』を評した者は大変多い。

最も早くこの書物を参照して日本の史実を述べたのは、黄遵憲の『日本国志』である。黄遵憲は1877年から1882年、清朝の駐日大使館参贊官を務めた期間中に『日本国志』の初稿を書き上げたが、その中に『日本外史』に言及する部分は多くある。例えば巻三「国統志三」にいう。

既而源松苗作『国史略』、頼襄作『日本政記』、『日本外史』、崇王黜霸、名分益張²⁶。

既にして源松苗『国史略』を作り、頼襄『日本政記』、『日本外史』を作り、王を崇め霸を黜し、名分益ます張る。

源松苗は即ち巖垣松苗であり、その『国史略』については既に述べた。頼山陽の基本的な政治思想、乃至彼が日本の歴史を纏めた主要な動機は尊王攘夷であり、つまり「王を崇め霸を黜」することでもある。黄遵憲の『日本外史』に対する着眼点もまた、この書の天皇を尊崇し、幕府を批判するという主張にあり、『日本国志』は幕末から明治初期の情勢の変動を論述するとき、何度も根拠として引用している。その「近世愛国志士歌」の自注にも、「尊王之義……頼襄作『日本外史』、益主張其説（尊王の義……頼襄『日本外史』を作り、益ます其の説を主張す²⁷）」といい、繰り返し述べていることに、その印象の深さが窺える。

黄遵憲が『日本外史』から恩恵を得たのは、自分が日本におり、早くに見ることができたからだとするならば、内陸に蟄居していた王先謙は、完全にこの書物の西伝によって利益を受けた者である。現在わかっている中でこの書物を最も多く引用しているのは、まず王先謙の『日本源流考』を挙げねばならない。王先謙(1842-1917)、湖南省長沙の人。字は益吾、葵園を住処としたため、人呼んで葵園先生という。著述は甚だ多く、晩年に中国が海外からの干渉を頻繁に受けるのを見、「洋」を知って初めて国を侵略から守ることができると考え、外国の歴史や地理に注目した。光緒二十八年(1902)に刊行された『日本源流考』はその成果の一つである。この書物は二十二巻で、光緒二十七年(1901)九月の自序のある刊本がある。この後彼は光緒本に改訂を行い、更に小字でシヤム、ミャンマーなどの項目を加えた。その眉批から、著者が更に朝鮮、琉球、ベトナム、マレーシアなどのアジア各国の史実についての記述を補おうとしていたことがわかる。そのため最終的にこの書物を『外国通鑒』と改題した⁽²⁸⁾。

『日本源流考』は中国人の編纂した初めての完全な編年体日本史であり、その題名から考えて、内容は歴史事実の考証であるが、それ以前の中国の「正史」の日本に関する叙述の多くが先行する記述を踏襲して行くばかりだったとは異なり、日本の史料を多く用いている。清末の学者が世界に向けていた視野の広さがよくわかる。『日本源流考』は干支で年を記すが、中国の歴代の年号と日本の天皇の年号を注として併記しており、主に各種史籍の中の日本に関する記載を集め、時に王先謙自身の考えを加えている。その自序には次のようにいう。

録日本開国以来迄於明治二十六年癸巳、采歷代史伝暨雜家紀載、參証日本群籍、稽合中東年表、為『源流考』二十二卷。⁽²⁹⁾

日本開国以来明治二十六年癸巳に迄るまでを録し、歴代の史伝暨雑家の記載を採り、日本の群籍を参証し、中東の年表を稽合し、『源流考』二十二巻を為る。

「歴代の史伝暨び雑家の紀載」とは、中国歴代の正史及び『山海経』や黄遵憲『日本国志』等の書物を指し、「日本の群籍」の方は、『古事記』、『日本書紀』、『日本史』（『大日本史』のこと）、『日本外史』、『日本維新史』、『和漢年契』等を含むと考えられる。その中で引用が最も多いのは『大日本史』であり、その次が、負けず劣らず詳細で該博な『日本外史』であり、筆者の統計に據れば『日本外史』を出処として明記するのは⁽²⁸⁾条にのぼる。『日本外史』の文章については、王先謙は明言していないが、その「自序」の末尾に「至日本史家文章之美、覽者自得之、故不復云（日本史家の文章の美に至るは、覽者自ら之を得、故に復た云はず）」⁽³⁰⁾という「文章の美」には、当然『日本外史』も含まれていよう。

この他、清末の唐才常『覺顛冥齋内言』、朱一新『無邪堂答問』、易鼎順『盾墨拾遺』、文廷式『純常子枝語』といった著作の中で、史実の視点から『日本外史』に言及されているが、ここからも『日本外史』が日本の歴史知識を普及させた功績が見て取れる。

『日本外史』の歴史書としての中国での影響は上述の通りであるが、その文章の闊達さが、「嘘」が事実を混乱させる事態を招いたこともまた、文壇のこぼれ話として言及しておこう。清末の丁仁『八千卷樓書目』巻八、史部地理類に次のような記載がある。

『日本外史』二十二卷、国朝頼襄撰、日本刊本。⁽³¹⁾

丁仁が頼襄を「国朝」の人としてしまったのは、うっかり誤っただけのはずであり、彼はこの後頼山陽の他の著述、例えば『山陽遺稿』等を録する際には、全て「日本頼襄」と明記しており、理解していなかったわけではないのは明白である。しかし多くの賢人を寄せ集めた『清史稿』の編纂者が、『日本外史』は自国の人の手に成ったと誤解していたことは、笑わずにいられない。芸文志二、史部の十一「地理類」の、「地理類外志之属」には、『日本外史』二十二卷、頼襄撰。⁽³²⁾と著録す

る。「地理類外志」には日本に関する著述を七つ収録しているが、頼山陽の作はその最初に挙げられており、残りの六つは全て中国人の作品である。順に挙げると、傅雲龍『游歴』日本図経』、黄遵憲『日本国志』（ここでは誤って「日本図志」に作る）、顧厚焜『日本新政考』、陳家麟『東槎聞見録』、何如璋『使東雜記』、吳汝綸『東遊叢錄』である。この六つの書物は皆、清末の中国人の日本研究の著述の中で時代を代表するものといえ、現在でもよく引用される。『日本外史』はこれらの書物と同列に並べられているのだから、無論その重要度は高い。同じように収録されている海外についての著述は、外国人の作品であれば明記されている。例えば『坤輿図志』については、「西洋南懷仁撰」と記される。また、作者が不明であれば、『朝鮮史略』や『越史略』についての記載がそうなっているように、「不著録人氏名（人の氏名を著録せず）」と書かれている。つまり、この頼襄という人物について、『清史稿』の編纂者は、彼が外国人であることを意識していないことがわかる。これと対照するに大変面白いのは、近代の学者吳闓生がその『晚清四十家詩鈔』に頼山陽『日本楽府』の「蒙古来」と「罵龍王」の二首を採録し、「此二詩絶高古、不似日本人口吻……意朱舜水之徒為之潤色者歟（此の二詩 高古に絶し、日本人の口吻に似ず……意ふらく朱舜水の徒 之が為に潤色する者か）」と評していることである。これもその人物を知っているながらその作品に疑いを抱いているのであり、それが日本人が他人の手を借りずに書き上げたものだと思いたくないのである。頼山陽がもしも黄泉で己の著作が漢学の「本場」で魚目珠に混じ、真偽を判じ難いものと成り得たことを耳にしたなら、会心の笑みを漏らすかもしれない。

頼山陽『日本外史』の中国での流布の状況は、概ね上に述べた通りであるが、日本漢文学の西伝という課題については、まだまだ明らかにするには遠く、多くの史料はまだ補充が必要で、分析や考察も未だ十分に深まっていない。今はひとまず問題提起を行って、諸大家の教えを乞うものである。

注

- (1) もと『復旦学報』（社会科学版）一九九六年第一期、九一―九七頁所収。
- (2) 梁川星巖『星巖詩集』丙集卷六「召頼子成。子成即日航湖見過、有長句、輒步其韻卻贈」詩の自注。富士川英郎、松下忠、佐野正巳編『詩集・日本漢詩』第十五卷、汲古書院、一九八九年、二六九頁。
- (3) 北垣恭次郎『国史美談』下巻、実業之日本社出版、大正九年（一九二〇）、二七六頁。
- (4) 『黄浦志』は月日を記すのに全て旧暦を用いるので、以下この書物を引く際には便宜上全て旧暦によることとする。
- (5) 「寺」は「時」の誤りであろう。応宝時は一八六四年二月から七月松江知府の候補として上海道台の代理を務めていた。
- (6) 『新村出全集』第十巻、筑摩書房、昭和四十六年（一九七二）、三三三頁。
- (7) 同上、三五四頁。
- (8) 同上、三五八―三五九頁。
- (9) 『日本外交文書』第六巻、九六号文書「附記」、外務省編纂、日本外交文書頒布会出版、昭和三〇年（一九五五）、一八七、一九一、二一〇、二二一頁に見える。
- (10) 孫宝瑄『忘山廬日記』（上）、上海人民出版社、二〇一五年、七三頁。
- (11) 王宝平主編『中国館藏日人漢文書目』、杭州大学出版社、一九九七年、一六三―一六七頁。
- (12) 同上、一六一―一六二頁。
- (13) 『頼山陽全書・全伝』下巻、頼山陽先生遺跡顕彰会編輯出版、昭和七年（一九三三）、七九七頁の記述に據る。但し書物そのものは未詳。
- (14) 岡田篁所『滬吳日記』、明治二十三年（一八九〇）刊、国会図書館蔵本、七―八頁に見える。
- (15) 富士川英郎、松下忠、佐野正巳編『詩集・日本漢詩』第十九巻、汲古書院、一九八九年、一八六頁。
- (16) 同上、一八六頁、一九七頁、二一四頁。
- (17) 小島晉治監修『幕末明治中国見聞録集成』第二十巻、ゆまに書房、一九九七年、三〇―三一頁。
- (18) 『漢文の話』下篇「日本での祖述」、吉川幸次郎全集』第二巻、筑摩書房、一九六八年、一六四頁。
- (19) 譚献『復堂日記』、范旭侖、牟小朋整理、河北教育出版社、二〇〇一年、一三〇頁。
- (20) 同上、六一頁。
- (21) 同上、六六頁。
- (22) 同上、一三〇頁。
- (23) 同上、四六頁。
- (24) 吉川前掲書、一六四頁。
- (25) 同上、一〇頁。

- (26) 黄遵憲『日本国志』、王宝平主編『晚清東遊日記匯編』影印本、上海古籍出版社、二〇〇一年、四九頁上。
- (27) 錢仲聯『人境廬詩草箋注』(上)、上海古籍出版社、一九八一年、二七四—二七五頁。
- (28) 中国公共図書館古籍文献珍本彙刊『外国通鑿稿』(全三冊)、中華全国図書館文献縮微複製中心出版、一九九七年。董又林「王先謙外国通鑿稿影印前言」参照。
- (29) 同上、一—二頁。
- (30) 同上、二頁。
- (31) 丁仁『八千卷樓書目』、広文書局一九七〇年影印本、卷八二九頁A。
- (32) 『清史稿』、聯合書店、一九四二年、五七四頁。
- (33) 『中華国学叢書』に収める。中華書局(台北)、一九七〇年、九一—九二頁。